

### KCELS第25周年大会を終えて

Catherine Vreeland

KCELS (Kobe College English Literary Society) 25周年おめでとうございます!今年度のKCELS年次大会では、KCELS発足25周年記念と共に音楽学部大学院設置を祝うために、2000年12月1日に「シェイクスピアとオペラ」というすばらしい行事が開催されました。今回は最優秀論文賞(イギリス文学、アメリカ文学、英語学)が三人の卒業生に与えられ、金城盛紀本学名誉教授による記念講演と、音楽学部教員による三オペラのパフォーマンスを解説付きでお聞きいただきました。本ニュースレターには、詳しく各プログラムイベントのご報告が載せられていて、12月1日の楽しさを思い出していただけだと思います。これから、KCELSの発足第二・四半世に向けてご発展とご成功を祈っております。

#### KCELS発足25周年大会プログラム

- I 神戸女学院大学英文学会発足25周年記念最優秀論文賞表彰式
- II シェイクスピア関連のオペラ作品の演奏

#### 演奏曲目

オペラ『カブレーティ家とモンテッキ家』より

(シェイクスピア劇との対比で)

台本: F. ロマーニ / 作曲: V. ベッリーニ

オペラ『マクベス』より

台本: F. M. ピアーヴェ、A. マッフエイ

作曲: G. ヴェルディ

オペラ『オテロ』より

台本: A. ポーイト

作曲: G. ヴェルディ



#### 解説者

金城盛紀 (英文学/桃山学院大学教授/本学名誉教授)

津上智実 (歌曲史・演奏史/音楽学部教授)

#### 演奏者

齋藤言子 (ソプラノ/音楽学部教授)

田中潤子 (ソプラノ/音楽学部非常勤講師)

西 明美 (メゾソプラノ/音楽学部教授)

荒田祐子 (アルト/音楽学部非常勤講師)

若本明志 (テノール/音楽学部教授)

橋 茂 (バリトン/音楽学部助教授)

中村 健 (ピアノ/音楽学部教授)

平川寿乃 (ピアノ/音楽学部オペラ要員)

### 神戸女学院大学英文学会(KCELS)

#### 発足25周年記念最優秀論文賞審査結果

この最優秀論文賞は、KCELS発足25周年を記念し、新進の会員の研究を奨励し、本会のさらなる充実をはかることにより、神戸女学院大学大学院英文学研究科の発展に寄与する目的で、設置されたものである。新進の研究の奨励という主旨から、応募資格を2000年9月30日現在、大学院入学後10年未満(もしくは研究歴10年未満)の人に限定し、募集を行ったところ、7編の応募があり、本学教員7名による審査が行われ、以下のように受賞者が決定した。(敬称略)

#### 最優秀論文賞

イギリス文学部門 該当者なし

アメリカ文学部門 戸田由紀子

英語学部門 今泉志奈子

#### 佳作

イギリス文学部門 山崎祐子

#### 講評

アメリカ文学部門 最優秀論文 戸田由紀子

「トニー・モリソンの『スーラ』におけるポリクロノトープの構造」

アフリカ系アメリカ人でノーベル賞作家のトニー・モリソンの小説『スーラ』に、バフチンのクロ

ノトープ理論を適用することにより、作品解釈に予期せぬ啓示的な局面をもたらしたことが評価された。

英語学部門 最優秀論文 今泉志奈子

「動詞の意味構造における『被影響』の概念の役割について—日本語の非動作主主語構文を中心に—

Jackendoff (1990)、Levin & Rappaport (1995) などで採用されている語彙概念構造の枠組にもとづいて、日本語における接辞-arの付加による動詞の交替現象を考察し、従来十分に説明されていなかった一連の関連現象は「被影響」(AFFECTED)という意味関数を導入することにより、統一的な分析が与えられると主張する。主として英語を対象に開発された理論を、十分に消化した上で、日本語データに適用し、母国語話者ならではの緻密な検証の上に立って、説得力のある議論を展開した点が推奨された。

イギリス文学部門 佳作論文 山崎 祐子

「Thomas Hardyの*Tess of the d'Urbervilles*における自我の概念—その差異による悲劇—

主人公テスには明確な自己意識が欠如しているという従来の見方に対して、テスの曖昧さは自らの信念に基づき、行動する主体としての自我の多面性の表れであると分析し、アレックスやエンジェルを理解を超えたそのような多面性が悲劇の原因であると主張する。作品に正面から取り組む読みの真剣さと主張の独自性が評価されたが、参考文献の比較、読みと議論の展開という点で物足りなさが残り、佳作にとどまった。

その他の応募論文については、テーマの統一性、読みの深さ、現在の批評動向における自作論文の位置付け(すなわち独自性)という3点において訴えるところが足りず、惜しくも賞を逸した。今後、問題意識の明確化をはかることが期待される。

3氏の論文は、2001年3月発行の神戸女学院大学の紀要『論集』に掲載される予定。

## ■特別講演(要旨)

### シェイクスピアの3作品について

#### 金城盛紀

神戸女学院創立125周年記念特別企画として、若手研究者を表彰し、「シェイクスピアとオペラ」をテーマとする第25回神戸女学院大学英文学会にお招きいただき光栄である。1975年、英文学科主任であった松村昌家教授の肝いりで発足したKCELSが4半世紀の発展を経た今日、

学生会みの親である松村氏と神戸女学院ならではの記念行事を着想し実現させた山田由美子教授にあらためて敬意を表したい。



『ロミオとジュリエット』は男女の純粋にして激烈な愛をテーマとしている。現実の人生において愛は純粋激烈なままで持続させることは不可能である。シェイクスピアは愛を一瞬の閃光として輝かせて、不滅の美しいものにしていく。下敷きにしたブルックの「奔放な激情に歯止めを」と論ずる韻文詩では二人の出会いから死まで9ヶ月に及ぶ物語を、シェイクスピアはわずか数日に短縮している。時間を尺度にすれば、「激情に歯止め」がかからないがゆえに死に至る、うたかたの恋であり、はかなき愛である。

男女の愛は持続しても、日常の生活がその変容を迫り、時間は容赦なくその純粋性を風化させる。だからこそ、ひとは『ロミオとジュリエット』に心を打たれるのである。この作品はわれわれの心に潜む絶対的な愛への願望憧憬に響き合う愛の賛歌である。

『マクベス』はその主人公が野心のために身を滅ぼす悲劇である。

マクベスは夫人に後押しされて王殺しを執行する。野望貫徹が即、未来の幸福を約束し、満足感、充足感をもたらすはずであった。しかし、fairと確信して実行した弑逆がfoulでしかないことが直ちに判明する。マクベスは国王の地位につくが、自然人倫に反して奪った王冠は実を結ばず王笏は不毛で、もたらされるのは満足感の代わりに不安であり、名誉ではなく恐怖であり、破滅である。この作品は有能かつ良心も想像力も備えたマクベスが野心に屈服した悲劇である。

『オセロー』では有能高貴な軍人オセローが、奸智にたけた悪党イアゴーが仕掛けた罠にはまり、純情で天使のような新妻を不貞の理由で殺すことになる。人生と世界に意味と価値を与える絶対的な愛で結ばれた二人の悲劇である。

威厳ある黒人将軍として彼の本来のありよう、デズデモナの夫に対する献身的な愛を知っている観客・読者に耐えがたいカタストロフィである。それだけに、絞殺の直後に真相を知った主人公が妻に対して行った「断罪」を自分に果たすとき、われわれはオセロー本来の人間性の回復、デズデモナが心から敬愛した英雄的人間像の再生として認識するのである。

## 特別講演（要旨）

### シェイクスピアとオペラ

津 上 智 実



シェイクスピアの戯曲は37作中32作がオペラ化され、総数は270曲以上に上るが、劇場のレパートリーとなっているのはヴェルディの3作《マクベス》、《オテッロ》、《ファルスタッフ》、ニコライ《ウィンザーの陽気な女房たち》、トマ《アムレ》、プリテン《真夏の夜の夢》など数曲である。戯曲とオペラは劇的性質やニュアンスの豊かさといった点で類似する一方、各々特有の形式や技法を備えている。ヴェルディは「シェイクスピアの主題をもっと取り上げたいが、常に妨げとなるのは次々と書割を変えねばならぬこと」と嘆いた。シェイクスピアに基づく優れたオペラ台本《オテッロ》をヴェルディに提供したボーイトも「オペラは演劇ではない。それは言葉で語られる悲劇にはない様々な要素を糧として生きている。かき乱された雰囲気は回復される。ある感情を甦らせるには8小節あれば充分だ。リズム一つで一人の人物を作り変える」と述べている。

シェイクスピアとオペラとの関わりを3つのオペラで考えてみよう。まずベッリーニ作曲《カブレーティ家とモンテッキ家》（ロマーニ台本、1830）は、シェイクスピアの種本でもあったポルトの小説『ジュリエッタとロ

メーオ』（1565）を原作とし、話しの大筋は同じだが、シェイクスピアの創作部分（舞踏会やバルコニーの場、マーキューシオや乳母などの脇役）は当然ながら欠落しており、この点をベルリオーズが1831年に酷評した。音楽的にはベッリーニ一流の息の長い雄渾な旋律美が堪能できるすぐれたオペラで、ロマーニはメゾ・ソプラノ、ジュリエッタはソプラノによって歌われる。

次にヴェルディの《マクベス》（台本はピアヴェとマッフェイ、1847）は、生涯シェイクスピアを愛したヴェルディが、まずシェイクスピアの自由な散文伊訳によって、オペラの幕割りからナンバー区分まで予め構成し、それを基に台本（歌唱用韻文）作成を依頼するという全く異例の手順で書かれた。「歌ってはいけない」「作曲家よりも詩人に仕えよ」と求め、音楽的にも朗唱性を前面に打ち出して人物の性格表現を強めた。野望に満ちたマクベス夫人はドラマティック・ソプラノ、表題役のマクベスはバリトンに配され、マクダフの哀切なアリアがテノールによって歌われる。

最後にヴェルディ晩年の《オテッロ》（1887）は、教養と才能溢れるボーイトの密接な協力を得てシェイクスピアに基づくオペラの最高傑作となった。戯曲の第一幕と多くの脇役をカットして筋の緊密化を図ると共に、イアーゴ（バリトン）を邪悪そのもの、デズデーモナ（ソプラノ）を汚れなき聖女として描くことによって、天と地との間で引き裂かれるオテッロ（テノール）の苦悩を力強い旋律と精妙な管弦楽法によって巧みに描き出した。幕切れの《オテッロの死》はヴェルディが最後までその演技表現に最もこだわった部分であった。

なお、アンコールとしてニコライ作曲《ウィンザーの陽気な女房たち》（モーゼンタール台本、1849）から幕切れのアンサンブルが軽妙な日本語訳で歌われた。

## キャンパスニュース

新学長就任（原田園子教授）

### <退任>

William Marling 客員教授 USA (Prof. of English, Case Western Reserve University, Cleveland, Ohio, 44106, USA)

Amitava Banerjee 教授 定年退職・名誉教授

東森 勲 教授 龍谷大学文学部

Steve Engler 専任講師 (外国人2年契約教員)

### <就任>

田島和彦 教授 ソニー(株) 自然言語処理研究主任

吉本多栄子 専任講師 新任

Kerstan B. Cohen 専任講師 (外国人2年契約教員)

(Engler専任教員後任)

## <会員消息>

### \* 今泉志奈子氏

2000年4月3日付にて、大阪大学大学院言語文化研究科言語情報科学講座助手に着任（任期最高で3年）

### \* 小杉 世氏

2000年4月 大阪大学言語文学部に赴任（講師）

### \* 田岡千明氏

The University of Manchester より Ph. D. in Linguisticsを授与される（2000年12月）

『女性・ことば・ドラマ』（共著、彩流社 2000年3月）

『英語・英米文学のエートスとパトス』

（共著、大阪教育図書 2000年3月）

### ◇馬場美奈子氏

『アメリカの多民族体制——「民族」の創出』

（五十嵐武士編、共著、東京大学出版会 2000年1月刊）

Critical Essays on E. L. Doctorow, ed. Ben Siegel

（共著 G.K. Hall & Co., 2000）

### ◇別府恵子氏

『新版アメリカ文学史——コロニアルからポストコロニアルまで』（共著、ミネルヴァ書房 2000年3月）

「心の領域を可視化する」『世界の文学 第35号』

（共著、朝日新聞社出版 2000年3月）

### ◇保坂華子氏

“Prosody of language learners’ speech : in English and Japanese.” *AILA ’99 Tokyo Proceedings CD-ROM*.

（第12回国際応用言語学会世界大会紀要CD-ROM）

Organizing Committee of the 12th World Congress of International Association of Applied Linguistics.

### ◇三宅伸枝氏

『近・現代的想像力に見られるアイルランド気質』

（共著、溪水社 2000年2月）

### ◇和気節子氏

『想像と幻想の世界を求めて——イギリス・ロマン派の研究』

（田村謙二編、共著、大阪教育図書 1999. 11. 30刊）

### ◇山田由美子氏

『シェイクスピアを学ぶ人のために』

（共著、世界思想社2000年4月刊）

『英語・英米文学のエートスとパトス』

（共著、大阪教育図書2000年3月刊）

## 国際学会発表

### \* 東森 勲氏

英国, Cambridge 大学で開催された Second International Conference in Contrastive Semantics and Pragmatics (2000年9月11~13日) にて研究発表。  
ポーランド, Lodz大学で開催された3rd International Moastricht-Lodz Duo Colloquium on Translation and Meaning (2000年9月22日~24日) にて研究発表。

### \* Catherine Vreeland氏

U.S.A, Texas Woman’s 大学主催の Renaissance Worthington Hotelで開催された The Computers and Writing 2000 (CW2K) Conference: “Evolution, Revolution, and Implementation : Computers and Writing for Global Change” (2000年5月25-28日) にて研究発表。

### \* 山田由美子氏

イギリス Stratford-upon-Avon, the Shakespeare Instituteで開催された International Shakespeare Conference (2000年7月30日-8月4日) にて研究発表。

## 大学院生による学会発表

### \* 井上怜美氏

立命館大学で開催された黒人研究会 (2000年11月25日) にて研究発表。

## 記念賞

2000年度以下の英文学科学学生に対して、次の学内の記念賞が授与されました。

大沢幸恵記念賞 E98028 久田絢美

デフォレスト記念賞 E98031 堀場たまき

## 会員による出版紹介

### ◇朝日千尺氏

『D. H. ロレンスのフェミニズムを読む』

(英宝社 : 2000年9月)

## 編集後記

KCELS 25周年を記念するNewsletterの作成にあたり、会員はもとより卒業生、本学の教員・職員の方々から積極的なご協力をいただき、ありがとうございました。

### KCELS Newsletter 編集委員

(2000年度運営委員)

◇平井雅子 ◇伊藤栄子 ◇Catherine Vreeland

◇山田由美子 (ABC順)

### KCELS Newsletter No. 16

編集発行 神戸女学院大学英文学会

〒662-8505 西宮市岡田山4-1

Tel (0798) 51-8548 Fax (0798) 51-8532

## 神戸女学院大学英文学会 会則

- (1) 名称  
本学会を神戸女学院大学英文学会と称する。
- (2) 目的  
本学会は本学英文学科および大学院英文学専攻卒業生の学術研究の継続と発展を奨励し、それら研究活動の発表と交流をはかり、あわせて在学生の向学研究意欲を推進することを目的とする。
- (3) 構成  
本学英文学科および大学院英文学専攻卒業生有志および本学英文学科教員を正会員とする。在学生を準会員とする。
- (4) 活動  
年一回、英文学会を開催する。  
Newsletterを発行し、会員の活動、英文学科の現況、本学英文学会その他の活動の内容を報告する。  
その他。
- (5) (a) 上記の活動運営のために運営委員会をおく。  
(b) 運営委員会は、学科長、学科会計委員と、若干名で構成されるものとする。

### 内規

- (1) 在学生を除き学会参加者は参加費500円を学会当日に納入する。
- (2) 英文学科教員は年に500円を維持費として納入する。
- (3) 維持費・参加費の徴収、及び郵送費など経費の支出は、学科の会計委員が担当する。
- (4) (3)に関しては、KCELS専用の口座を利用する。

1995年4月1日施行